

GF

ジェンダーフォーラム
通信

GENDER FORUM PRESS

和光大学 ジェンダーフォーラム 〒195-8585 東京都町田市金井ヶ丘5丁目1番1号 和光大学ジェンダーフリースペース(G112) TEL 044-989-7777 内線4112 gen-free@wako.ac.jp

MEMORIAL

『日本のフェミニズム—150年の人と思想』刊行記念 「井上輝子さんを語る会」報告

日本初の女性学講座を開設し、ジェンダーフォーラムの礎を作った井上輝子さん（和光大学名誉教授）が2021年8月に急逝されました。コロナ禍で葬儀がご親族だけで営まれたこともあり、深い悲しみの中にいた多くの方から「お別れの会」の企画を要望する声が寄せられました。

ここ数年、井上さんは、集大成となるご著書にとりくんでおられましたが、残念ながら完成をみることはありませんでした。これを刊行したいという井上さんの病の床での強い思いを受け、未完の章を今までの論考で補うという構成で、『日本のフェミニズム—150年の人と思想』の編集が進められました（12月有斐閣より刊行）。その刊行記念の会として「お別れの会」を持つと、9月に阿野理香、境磯乃、佐藤文香、千田有紀、中村ひろ子、船橋邦子、満田康子、山田敬子で実行委員会を組織し計画を進めました。会の名称は遺著刊行記念「井上輝子さんを語る会」。ただ偲ぶだけでなく井上さんの幅広い活動について、またどう継承していくかを語る場にしようということになりました。

和光大学ジェンダーフォーラムに共催団体になっていたのですが、その他井上さんの幅広い活動の場に関係した、あい女性会議、日本女性学会、日本婦人問題懇話会同窓会、北京 JAC、山川菊栄記念会、WAN（ウィメンズアクションネットワーク）の合計7団体が共催を引き受けてくださいました。

2022年3月21日、「『日本のフェミニズム—150年の人と思想』刊行記念 井上輝子さんを語る会」が会場90名、Zoom160名の参加で行われました。コロナ禍であり、ハイブリッド方式としましたが、会場参加数を制限した結果、会場参加を希望されながら Zoom 参加をお願いせざるをえ

なくなった方も出てしまいました。

挨拶は樋口恵子、福島みずほのお2人。スライド上映「井上さんの人・仕事」、「遺著ができるまで」を満田康子、「女性学の創始者として」を上野千鶴子、江原由美子、村松泰子、船橋邦子の4名。船橋さんは、情勢を客観的にとらえ、丁寧に粘り強く周囲を巻き込みながら「たたかう」井上さんの姿を具体的に紹介されました。その後「教育・地域への取組み」、主に「和光大学と井上さん」を諸橋泰樹、杉浦郁子、渡邊愛里、山田敬子が、遺著についてを浅倉むつ子、跡部千慧、最後に「井上女性学を受け継ぐ」として佐藤文香、千田有紀のお2人がその決意を語られました。続いてお子さんの井上（飯田）雅子さん、井上康彦さんが献花台、遺影の前でみなさんへのお礼を述べ、最後に境磯乃実行委員長が、和光大学の最終講義の「私たちの世代は私たちに、女性学の種を蒔きましたが、その種を育て、それぞれの花を咲かせるのは、次の世代の皆さんの仕事です」の言葉を引用し、井上さんの思いを受け継ぐ決意を述べ、閉会となりました。



▲和光大学在任当時の井上輝子先生

また追悼集『惜別 井上輝子さん』を会場参加者に配布しました。井上さんが急逝された直後から WAN (ウィメンズアクションネットワーク) は特設サイトを設け、追悼文を募集、掲載されていまして、第 1 部は、この WAN の追悼文プラス新たに寄せられた追悼文で構成し、合計 76 名の方の追悼文を掲載しています。秋の再会を約束して 7 月の例会を終えていた GF 読書会のみなさんが急逝されたその衝撃と悲しみをつづった追悼文を、また和光大学同窓会のご尽力で多数の卒業生の方が思い出をお寄せくださり、充実した冊子となりました。第 2 部には、遺著を読むにあたって参考になると思われる文章を集め、また川崎市のすくらむ (男女共同参画センター) のインタビュー記事の転載、絶筆 (医療従事者へのお礼) なども収録しました。

和光大学図書館・ジェンダーフォーラムに寄贈させていただきましたので、ぜひご覧になってください。(山田敬子・井上輝子さんを語る会実行委員、山川菊栄記念会)



▶左より『日本のフェミニズム—150年の人と思想』(2021年、有斐閣)『惜別 井上輝子さん』

GF EVENT

『現代の編集と出版』授業内野中モモ氏講演

(2022年7月11日 実施)

私は、共通教養科目『現代の編集と出版』という授業を、適度にアップトゥデートな話題を織り交ぜながらやっている。そこで、ヴィヴィエン・ゴールドマン『女パンクの逆襲』(原題 REVENGE of She-Punks) が翻訳出版され、訳者の野中モモさんが知己でもあったので、ジェンダーフォーラムのご協力を得て共催というかたちで教室にレコードプレーヤーを持ち込み同書に登場する女性パンクロッカーのレコード (もちろん当時の) をかけながら対話形式の特別授業を行った。1970年代後半のパンクロック・ムーブメントは、それまでマスキュリティとマッチョが事実上の中心的規範だった “男のロック” の世界で、数々の女性演奏

者たちが、さまざまな角度から意匠をこらしてステージに立ちメッセージを発信していった革新的な時代だった。著者ゴールドマンはまさにそのムーブメントを体現するかのよう、NME など英国の音楽業界紙に現在進行形の記事を書き、やがては自身も楽器に堪能ではない「しろと」の、つまりは D.I.Y. 精神に満ちた「表現者」としてとんがった音楽を発表していった。彼女はまさしくパイオニアのひとりであり、現在ではニューヨーク大学ほかの訪問教授もつとめている。

訳者の野中さんもまた、英国ゴールドスミスカレッジ大学院に進み、現在では、D.I.Y. 精神にもとづくジン (zine) = 個人レベルの独立雑誌メディアの応援をしたり、フェミニズム関連の本の翻訳を積み重ねている。90分という時間枠がうらめしく感じるほどに、スリッツ、レインコート、グレース・ジョーンズ、またゴールドマンのソアアルバムなどをかけながら、当時のシーンの説明や何が革新的で現在の音楽表現につながっているかについて、テンポ良い語り生まれ、ふだん受講していない学生も多く参加し、後にコメントペーパーからは「ふだんの授業とはまた違って楽しかった、ああいう授業があっても良い」などの感想をもらった。ご協力ありがとうございました。(野々村文宏・芸術学科)



▲『現代の編集と出版』野中モモ氏講演はレコードをかけながら対話形式で行われた



▲野々村文宏先生と野中モモ氏

GF EVENT

2022年度デートDV防止啓発講座

2022年11月24日(木)、今年度もデートDVの防止啓発講座が開催されました。ここ数年は、町田市男女平等推進センターが主催し、徳永貴志先生の共通教養科目「法と人権」の授業に講師をお招きし、ジェンダーフォーラムは共催というかたちをとっています。今年度の講師はNPO法人レジリエンスの西山さつき先生でした。

先生のお話は、DV がとても身近なものであることから始まり、被害者が加害者からなぜ距離をとることができないのかというトラウマティック・ボンディングという概念の紹介、不健全な関係や尊重のない会話の具体例、自分や友達が DV の被害にあっているときにすべきことなど、ひとつひとつ、とても丁寧に説明をしてくださるものでした。

およそ 120 名ほどの受講者はいずれも真剣に話を聞いてくれており、講演の終了後も西山先生に質問する学生がいたりなど、ひとりひとりがデート DV を自分の生活空間にありうべきものとして (再) 認識してくれたように見受けられました。

(杉本昌昭・ジェンダーフォーラム代表 経営学科)

<受講した学生のコメントを紹介します>

今まで DV について深く考えることがなく、自分にはあまり縁のないことだと考えていましたが、3組に1組の割合で DV が起きていると知って自分や自分の周りの人にも起こりうる身近な問題で他人事では無いと感じました。私は、悩みがあるときは親や友達に相談することが多いのですが、DV を受けている側の人は「あなたが悪い」と言われて暴力を受け続けることで自分が悪いのだと信じ込み、無気力になって自分の考えや思いを話すことや、誰かに相談する気力もなくなってしまうのだと感じました。

DV を子どもが目撃してしまった場合には、その場面が一生心に残ったままトラウマになってしまう可能性があります。また、健全な関係性が学べずに育つと、その子どもも将来パートナーや子どもに虐待、DV をしてしまう可能性があるのではないかと考えました。これまでは、自分が DV を受ける立場になったことがなく、周りにも DV を受けている人はいませんでしたが、もし自分が被害にあった時や、友達が被害にあっているまたは暴力をふるっているを目撃した時に、どうすればよいのだろうか考えるきっかけになりました。暴力ではよい関係性は築けないし、何も解

決できないと思います。お互いによくコミュニケーションをとること、人と人のつながりを大切にすることが虐待や DV の防止につながるのではないかと考えました。

(心理教育学科 学生)

私はこれまでデート DV について考えたことがあまりなく、今回の講義で改めて考え直しました。10代カップルでのデート DV は3組に1組起きていると知り、驚きました。DV は暴力だけではなく、身体的なものから性的なものまで幅広くあり、それらを考えると「3組に1組」は頷けると思いました。今回の講義を聞いて、自分自身、暴力はしたことはないけれども、言葉の暴力はしたことがあったかもしれないと思いました。以前付き合っていた人と話が噛み合わないことや意見の食い違いなどがあり、その時に少しイラッとできてしまい、強く言ってしまったことがありました。今思うと、それらは DV に値すると感じました。講義でもあった通り、怒りやストレスが溜まっても暴力を使わない方法はたくさんあるため、自分自身がしっかりと冷静になり、嫌なことは嫌と伝え、きちんと話し合えば、相手を傷つけずに済んだのかなと思いました。

これまでの人生で、何回か友達が DV を受けているという話を聞いたことがあり、「別れた方がいいよ」などと声をかけたことがあります。でも、それは間違っているとわかりました。友達は私を信用して話してくれていたのに、そのような受け答えをしてしまったことをとても後悔しています。一緒に信頼できる大人に相談したり、「あなたは何も悪くないよ」と声をかけたり、友達の話をしっかりと聞いて考えればよかったと思いました。今回の講義で、私自身今までの行動で反省すべきところがたくさん見つかりました。これからはしっかりと今回の講義内容を意識し、DV を受けている人を助ける、支えるということを常に意識して行動したいと思います。(人間科学科 学生)



▲西山さつき先生の講演の様子

2022年度卒論発表会

今年度の卒論発表会は、2023年1月18日(水)、昨年度・一昨年度と同じく、Zoom ミーティングの形式で開催されました。報告者は2名、現代社会学科・山田優希さん「フィクトセクシュアルとして生きる ― 二次元と共に生きる人びと」(打越ゼミ)、現代社会学科・北平朗与さん「伝統的男性に潜む凶器 ～男性性の再生産を止めるために ― 「性=らしさ」からの解放～」(杉浦ゼミ)です。参加者は、2人の指導教員を始め、ジェンダーフォーラムの担当者とスタッフ。小規模な会でしたが、かえって議論が深まり、発表・質疑はそれぞれ90分ほどという濃密な場となりました。

山田さんの卒論はアニメやゲームなどのキャラクターに恋愛感情を抱く人びとを〈フィクトセクシュアリティ〉という新しい概念を用いて考察するものです。先行研究をレビューし、二次元のキャラクターに恋愛中の当事者4名に対するインタビューを行い、それぞれが想い抱く恋愛感情を丹念に再構成しています。このインタビューの部分は厚い記述となっており、当事者のリアリティがよく再現されています。結論部では、〈フィクトセクシュアリティ〉概念の再検討をしたうえで、多様なセクシュアリティが許容される社会を目指すという主体的な宣明となっており、とても頼もしく感じました。

打越先生からは、〈フィクトセクシュアル〉という新しい概念にかかわり、1980年代から喧伝され始めたいわゆる〈二次元コンプレックス〉との異同が当初は判然としなかったものの、指導のなかで自分も理解が深まっていったとお話がありました。杉浦先生も、山田さんが研究室を訪問してくれて、〈フィクトセクシュアル〉を熱く語ったことから興味をもち、ご自分の授業にこの概念を用いて研究をされている松浦優氏(九州大学)をゲストスピーカーとして招かれたそうです。卒業論文の執筆と指導を通じ、学生も教員もともに理解を深めていくさまがありありとわかり、とても嬉しく思いました。

北平さんの卒論は、先行研究を引きつつ、男性性の階層構造を提示し、それが上層であっても下層であっても、〈有害〉でありうるという視点に立ち、〈有害〉の極相として〈軍事的男性性〉に触れ、男性性と武器・兵器との結びつきに言及するものです。議論のなかでは、いわゆる男性学の視点も考察の対象となり、しかし〈男もつらいよ〉的な議論には、考察の深みがたりないことを

指摘しています。また、伝統的男性性の温床として、日本の教育文化、とくに中学校・高等学校における部活動における体罰・しごきなどの事例をあげ、みずからの学校生活における体験も引証し、議論を進めています。

指導された杉浦先生から、北平さんは当初、男性性と兵器、とくに核兵器との結びつきを中心に考察を進める構想だったものの、文献が少なく、みずからの生活経験を土台とする議論に切り替えたとの補足のご説明がありました。テーマを設定し、構成を練るなかで、先生のご指導を通じ、みずからの問題意識に立ち返って議論を構築し直すという過程がつまびらかになったことで、卒業論文の生い立ちをかいま見ることができました。学生と指導教員、そしてギャラリーが、完成した卒業論文を取り囲んで議論を行う卒論発表会ならではの成果だと思います。

ジェンダーフォーラムでは、次年度も卒論発表会を開催することになるかと思えます。学生の皆さんの発表と先生方の幅広い参加をお待ちしています。

(杉本昌昭・ジェンダーフォーラム代表 経営学科)



▲Zoomを使ったオンラインでの卒論発表会の様子

BOOK REVIEW

渡辺ペコ著 『恋じゃねえから』

講談社、2022年、定価660円+税

<あの頃 先生と紫は 恋をしていた そのはずだった>
既刊2巻。連載中(『モーニング・ツー』『コミック DAYS]) ※このマンガはフィクションです。

中学時代、塾講師の今井と恋をしていた紫(ゆかり)。26年後、今井は彫刻家となり、少女像を発表しました。その像は、14歳の紫によく似ていました。今井は26年前に14

歳の紫の裸の写真を撮っており、それを紫に無断で像のイメージの参考にしたそうです。40歳となった紫は、像のことを、中学時代の親友、茜から聞き傷つきます。茜に同行してもらい、今井に作品の取り下げを頼みにいきますが、今井とその妻に拒絶されます。

何とも重い内容ですが、絵の美しさという魅力がそれを和らげてくれています。26年前の、瑞々しい14歳の紫と美青年・今井の恋は美しく、ロマンチックに描かれています。しかし、今井の個展で少女像を観た40歳の紫が当時の恋を振り返った時、美しいというよりも苦い思い出としてフラッシュバックし、具合が悪くなってしまいます。ここで、この物語は成人と未成年の恋について大きな問いを読者に突き付けます。美しさやロマンチックさでうまくコーティングされて見えなくされてきた、恋愛や創作の持つ暴力性が、読者の目の前に提示されます。

紫と親友の茜、40歳の中年女性2人は手を取り合って、少女像の問題に立ち向かっていきますが、全くの孤立無援という訳ではありません。紫に親身になって相談に乗ってくれる青年・玄、厳しい現実を正直に伝えるものの、誠実な対応をする弁護士らが、今後味方になってくれるのか? 紫と玄との心が和むやり取り、茜と中学生の娘との微妙な関係性が描かれる点も物語に奥行きを持たせています。彫刻家となった今井が、20代の精神年齢のまま成長しておらず、幼くて、全く魅力的に描かれていないのも、興味深いです。

マンガは現在連載中で、続きが気になりますが、続巻が発売され次第ジェンダーフリースペースの蔵書として追加される予定です。是非手に取って下さいね。

(西川春菜・ジェンダーフォーラムスタッフ)



BOOK REVIEW

杉浦郁子、前川直哉著 『「地方」と性的マイノリティ ―東北6県のインタビューから』

青弓社、2022年、定価2000円+税



ジェンダーフォーラムとも関わりの深い、人間科学科の杉浦郁子先生が、福島大学の前川直哉先生と共同で執筆した『「地方」と性的マイノリティ―東北6県のインタビューから』(青弓社)が2022年11月に出版されました。

「進んでいる東京/遅れている地方」は本当なのか、日本の性的マイノリティと「地方」を研究テーマにした初の書籍です。

杉浦先生は2019年度にサバティカル(研究休暇)を取得し仙台に居住して、東北地方の性的マイノリティ団体の代表者などにインタビューを行い、多彩な活動を記録してきました。今回、その成果を出版することになりましたので、皆さま是非お手にとってご覧ください。

また、杉浦先生が行ってきたインタビューの詳細は報告書(2021年2月)にまとめられており、そのほとんどが以下のWebサイトで公開されています。



▲L-archives 東北地方の性的マイノリティ団体 活動調査報告書



▲東京大学 REDDY

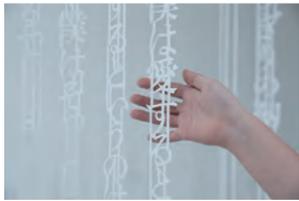
2022年度 芸術学科 卒業制作より作品紹介

和光大学表現学部芸術学科では、卒制・卒論審査会を例年 12 月に行っています。その中でもジェンダー関連のテーマ性を持つ研究や制作がある場合は 1 月の卒論発表会での発表を呼びかけていますが、以下の 2 名の学生は参加意思がありながらも日程的に叶わなかったこともあり、代わりに誌面にてご紹介したいと思います。

<作品 1>

秋葉梨香さん（ヴィジュアルコミュニケーション・デザインゼミ）は、ジェンダー・スタディーズ・プログラム関連科目の学びと、自身の個展での BL 漫画の装丁やカードゲーム展示などの学内外の活動を交えて研究した 4 年間の成果を、最終的にインスタレーションに仕上げました。

1954 年（昭和 29 年）刊行の BL 文学「福永武彦『草の花』」から引用した一節の文字を「触れる文字」として天井から吊り下げ、そこに観客が入ることで「新しい読書体験」として提供する作品です。主人公の男性の繊細な心情、特に相手の青年への想いと共に描写された風景を思わせる潮の満ち引きの「音」やうつろう「光」に包まれ、作家の描いた“孤独と愛”が総合的な空間アートとして表現されています。



▲秋葉梨香 作品名「福永武彦『草の花』」
インスタレーション（水・絵具・テグス 吊り道具
ライト・スピーカー、モーター、プロペラ）
2500 × 2500 × 1750 mm



◀前田美佳
作品名「ママ、だいすき」
映像（6min. 55sec.）

<作品 2>

前田美佳さん（情報メディア・デザインゼミ）は、心理教育学科の菅野恵先生の授業で児童虐待問題に触れたことをきっかけに、アニメーション作品「ママ、だいすき」を制作しました。年間 20 万件を超えるほど増加傾向の児童虐待問題（2020 年度厚生労働省調査）について統計的に調べ、虐待に至ってしまう状況を子供目線で描いた 7 分弱の映像です。

虐待が日常化することにより、虐待として認識しなくなる「被虐待児童候群」についての分析をもとに、ひとりで育児を抱え理解のない夫に悩む母親とその幼い娘を登場人物として描きました。発生原因に多いとされる保護者の育児ストレスや不安の多い環境にはジェンダーをめぐる社会的要因も提示されているようです。

こうした作品は、和光大学の特徴でもある講義バイキング制度を活用し、実技分野と文学・社会学・心理学などを合わせた学際的なアプローチで、様々な専門家の助言をもとに具現化された作品と言えるでしょう。副査や情報提供者としてご協力くださった先生方、映像に声優として制作に参加された学生の皆さんにも心より感謝申し上げます。

作品は、横浜市民ギャラリーと BankART KAIKO で 2023 年 3 月 1 日（水）から 3 月 5 日（日）に開催された芸術学科卒業制作展 2023「はなればなれハレバレ」でお披露目となりました。（畑中朋子・芸術学科）

INFORMATION

ジェンダー・スタディーズ・ プログラム紹介

<ジェンダー・スタディーズ・プログラムとは>

このプログラムは、和光大学のすべての学生に開かれており、教職課程のように別途単位修得しなくても、ジェンダー関連科目を系統的に単位修得（20 単位以上）し、卒業年次にレポートを提出することで修了となります。ジェンダー関連の科目を履修している・履修しようとしている学生は、是非申請してください！

卒業年次に所定のレポート等を提出し修了が認められると、卒業時に「ジェンダー・スタディーズ・プログラム履修証明書」を発行します。この証明書は、教員免許や司書などとは異なり、直接就職につながる国家資格ではありませんが、ジェンダー関連の知識を身につけた証となり、就職活動や社会生活に活かすことができます。

<履修のメリット>

- ・ジェンダーに関する科目を系統的に履修できます。
- ・日々の生活の中でジェンダーに関する課題を見つけ、対処できるようになります。
- ・多様な働き方や生き方の設計に役立ちます。
- ・セクシュアル・ハラスメントや DV などの暴力の被害者にも加害者にもならない準備ができます。

<プログラム修了までに必要なこと>

STEP1 [1～4 年次の 4 月]

プログラム履修申請 ※何年次でも申請できます！
毎年 4 月にプログラム履修説明会を開催し、申請を受け付けています。説明会に出席せずに申請することもできますが、初めて申請する学生は是非説明会にご参加ください。

STEP2 [履修申請後毎年]

「プログラム履修状況表」の提出
一度申請した学生は、原則毎年、STEP1 の申請受付期間中に「プログラム履修状況表」を提出することが必要です。毎年、提出することでジェンダー関連科目の履修状況を振りかえり、プログラム修了に向けての見通しを立てることができます。

STEP3 [卒業年次]

レポート等の提出
3 月に卒業する場合は 1 月頃、9 月に卒業する場合は 6 月頃に、所定のレポート（レポート I、レポート II）および「プログラム履修状況表」を提出してください。

- * レポート I…ジェンダーに関連するレポート（2,000 字程度）。卒論でも代替可。
- * レポート II…「履修したジェンダー関連科目を振り返って」というタイトルのレポート（2,000 字程度）
- * 12 単位を超えて修得した科目群 I の単位は、科目群 II として加算できます。
- * 科目群 I・II、その他プログラムの詳細は、学内で配布している「ジェンダー・スタディーズ・プログラム」リーフレットや、『学修の手びき』でご確認ください。

<修了者数とレポートタイトル>

2019 年度以降のジェンダー・スタディーズ・プログラム修了者数と、レポート I として提出されたレポートタイトルを一部ご紹介します。

2019 年度 8 名修了

- ・「震災と LGBT」を考える座談会を通して学んだこと
- ・ジェンダーレスファッションとジェンダー規範—ジェンダーレスファッションの普及—
- ・『巨食症の明けぬ夜明け』における「巨食症」から考察する孤独の受容と飢え
- ・中山可穂『白い薔薇の淵まで』からみる多様性のゆくえ

2020 年度 3 名修了

- ・特別視される同性愛と（恋愛＝子孫繁栄）言説
- ・教育現場における性の多様性理解に向けて～教員の課題と性の多様性に関する学習の考察～
- ・特定の精神疾患とジェンダー観の結びつきについて

2021 年度 8 名修了

- ・ジェンダーに関する炎上した CM の考察
- ・保育者のジェンダー観と子どものジェンダー規範形成との関係—保育者へのアンケート調査より—
- ・学生服とジェンダー
- ・世界の性教育と日本の性教育を考える～日本と各国の実態～
- ・男性同性愛者をめぐる世代間のコミュニティ認識～ゲイコミュニティの歴史と社会状況～



▲ジェンダー・スタディーズ・プログラム履修証明書（見本／表・裏）

2022年度から2023年度へ

今年度も、ジェンダーフォーラムの活動をご支援いただき、まことにありがとうございました。

残念なお知らせなのですが、2011年度から10年以上にわたり、ジェンダーフォーラムのスタッフをお務めくださった阿野理香さんが、ご大病を患われ、ご勇退されることになりました。現在、病状は落ち着いているとのこと、一安心です。以下のメッセージを頂戴しました。

「発見が早かったことで命が救われましたが、ガンっていきなり来るものだなと実感しています。しかし発見が早ければ治ることが期待される病気です。みなさまには、ぜひぜひガン検診をお勧めしたいと思います。そしてガンにかかったことは今後の人生を深く考えるきっかけとなりました。これからは、GFSは西川さんにお任せして、私のできる範囲内で活動のお手伝いをさせていただきます。」

阿野理香



▲和光大学大学祭（2013年）GFS展示と阿野理香さん

次年度は、西川さんをスタッフに迎え、教員の担当者も新体制となります。新しい体制となっても、もちろんジェンダーフォーラムは活動を続けてまいります。アフターコロナと呼べる社会状況となっているのか、先行きは不透明ですが、ジェンダーフリースペースに学生が集い、対面のイベントも数多く開催できるようになればと祈っています。

（杉本昌昭・ジェンダーフォーラム代表・経営学科）

<新スタッフ自己紹介>

はじめまして。2023年1月からジェンダーフリースペースのスタッフをしている西川春菜と申します。以前の大学では柳田國男や和辻哲郎を読み、和太鼓をやっていたことから興味を持った「日本の祭」について卒論を書きました。和光大学では半田滋男先生のもとで博物館学芸員資格を取り、図

書館司書資格も所持しています。ミヒヤエル・エンデ『はてしない物語』や紫式部『源氏物語』（現代語訳）などのたくさんの登場人物が出てくる本が好きです。

私は3年前に和光大学で科目等履修生として学んでいました。その当時、芸術学科の畑中朋子先生の講義でジェンダーに関するレポートを提出したご縁で、ジェンダーフォーラム卒論卒制発表会に参加しました（GF 通信 Vol.32に掲載）。その時にジェンダーフォーラムやジェンダーフリースペースのことを知りました。今回も、畑中先生のご紹介によりジェンダーフリースペースで働くことになりました。

今年もジェンダーフォーラム卒論卒制発表会に出席しましたが、たくさんの文献や丁寧なインタビューに基づいた説得力のある発表でした。ジェンダーに関して、まだまだ私の知らない世界がたくさんあるのだな、と勉強になったと同時に、新しい考え方や価値観に触れて良い刺激を受けました。

ジェンダーという言葉は、私にとっては自分が10代だった1990年代に耳にするようになったと記憶しています。1997年に世田谷美術館「デ・ジェンダリズム～回帰する身体」という展覧会を観に行っても衝撃を受けたのを覚えています（※本展カタログもジェンダーフリースペースに所蔵）。このほど、ジェンダーフリースペースにあるジェンダー関連図書から、若い人に関心を持ってもらえそうな書籍をピックアップし紹介していくことになりました。チラシ形式でスペース内に設置すると同時に、本誌面でもご紹介させていただきます。

和光大学はアットホームで、先生方と学生さん達の距離が近く、とても通いやすい居心地の良い大学という印象です。開室時間は部屋にいますので、本を読んだり、お昼休みにお弁当を食べたり、お話ししたり、作業をしたり…などなど、どうぞお気軽にいらしてくださいね。

（西川春菜・ジェンダーフォーラムスタッフ）



▲GFSの一角：過去のジェンダー・スタディーズ・プログラムのレポートやジェンダーに関する書籍がたくさん置いてあります。